

2008 Vol.

15

文部科学省
私立大学戦略的研究基盤形成支援事業

採択記念号



〈心の危機と臨床の知〉というテーマのもとに
研究活動を進め、11年目を迎えました。
今年度は、これまでの成果を引き継ぎながら、
新しい研究事業を立ちあげ、4つのプロジェクトを動かしています。
今秋、文部科学省の支援事業に採択されたことを受け、
いよいよエンジン全開です。
ニュースレター vol.15 では新しい取り組みをご紹介します。





新しい研究事業

今年度より新たな研究事業が開始されましたのを機に、ご挨拶させていただきます。

今回の事業は、過去10年間にわたる研究事業（文部科学省学術フロンティア推進事業に2期連続採択・平成10～19年度）の成果を引き継ぎ、現代人の心の危機の見極めと、その実践的解決のためのネットワーク形成を行うことを目的としています。

学術フロンティア推進事業が終了したのを受けて、新たな研究助成制度、「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」に応募し、幸い採択されましたので、今後5年間にわたり、さらに研究を深化させ、成果を社会に還元していきたいと考えています。

プロジェクトは、4つの柱から成っています。1.「加害－被害関係の多角的研究」、2.「育てる関係の危機と子育ての意識の多相性についての研究」、3.「芸術学と芸術療法の共有基盤確立に向けた学際的研究」、そしてそのいずれにも関わる4.「心理療法の現在に関する検証－臨床と研究の即応的関係の構築－」です。現在、臨床実践の緊急課題となり、今後さらに重要となるはずの問題領域ばかりです。

「加害－被害関係」「育てる関係」「芸術学と芸術療法」のいずれにしても、多くの学問領域にまたがる問題であり、学際的なアプローチがなければその全体像を検討することはできません。しかし他方で、学際的研究は、ややもすれば各領域の成果を発表しあって相互に学ぶにとどまり、新たな視点や知見を共同で発見するに至らないことが多いのも現実です。

当研究所の特色は、臨床心理学、精神医学という臨床実践を担う学問と、人文諸科学の各分野にまたがる専門家を抱えているところ、そしてすでに長期にわたって共同研究を進めてきた経験を持つところにあります。今回のプロジェクトでは、それぞれが成果を持ちあって発表し討論するにとどまらず、大学の外へ出かけ、アンケート調査・インタビュー調査を実施し、得られたデータに基づいて新たな発見を行うことを目指しています。

そのため、いずれの研究プロジェクトにも調査研究を1つの柱として組み込み、調査計画の段階から学際的な視野を持って、互いに意見を戦わせながら計画をたててきました。また今後の研究活動や調査結果の分析においても、複数の専門領域から検討し、よい成果を得ることを目指していきたいと考えています。たとえば、私に関わっております戦争研究では、臨床心理学、精神医学と歴史学、社会学が共同することで、戦争の残した影響をできるだけ全体的にとらえることを狙っています。子ども時代に体験した戦争の全体像は、心理的な影響から社会的な影響、その歴史的位置づけなどを総合することではじめて見えてくるものと予想します。他の研究プロジェクトについても同様の姿勢を持って、研究対象を多角的に、総合的にとらえる試みを行っていききたいと思います。

活動の企画の中には、公開の研究会やシンポジウムなども組み込まれています。研究活動に関心を寄せていただくと共に、公開の催しにはぜひ多数の方に参加いただき、活発なご意見をいただけることを期待しています。

文部科学省

私立大学戦略的研究基盤 形成支援事業

採択を受けて



所長 森 茂起（文学部教授）

<共同研究事業 I～III>

I. 平成10～14年度

「現代人のメンタリティに関する総合的研究」

——心の危機の臨床心理学的・現代思想的研究
(文部科学省学術フロンティア推進事業採択)

II. 平成15～19年度

「現代人の心の危機の総合的研究」

——近代化のひずみの見極めと、未来を拓く実践に向けて
(文部科学省学術フロンティア推進事業採択)

III. 平成20～24年度

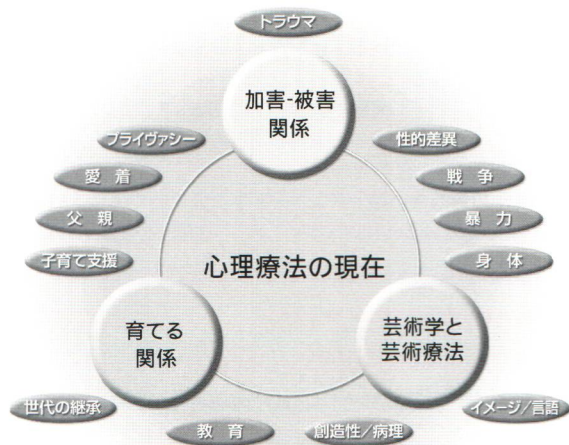
「心の危機の見極めと実践的ネットワークの創造」

(文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業採択)

共同研究事業Ⅲ

心の危機の見極めと 実践的ネットワークの創造

—4つのプロジェクト—



プロジェクトの相関とキーワード

<企画者>

プロジェクト1.
加害—被害関係の多角的研究

森 茂起 (臨床心理学)
港道 隆 (哲学)
北川 恵 (臨床心理学)

プロジェクト2.
育てる関係の危機と子育ての意識の多相性についての研究

高石 恭子 (臨床心理学)
穂苅 千恵 (臨床心理学)

プロジェクト3.
芸術学と芸術療法の共有基盤確立に向けた学際的研究

川田都樹子 (美学/芸術学)
西 欣也 (美学/文芸学)

プロジェクト4.
心理療法の現在に関する検証—臨床と研究の即応的関係の構築—

穂苅 千恵 (臨床心理学)
森 茂起 (臨床心理学)
高石 恭子 (臨床心理学)

プロジェクト1.

加害—被害関係の多角的研究

トラウマを主題としたこれまでの研究を発展的に継承します。児童虐待、犯罪、戦争などの問題、あるいはそれらの外傷性の作用を、「加害—被害関係」という共通の問題構造でとらえ、個人間から国家間までの暴力が研究対象となります。したがって、研究の視点を、トラウマを抱える個人の「内面」だけでなく、暴力的作用を与える側と与えられる側の「相互関係」に当て、様々な領域における「被害/加害」現象の詳細な検討と、その関係を修復する方策の探究を目的としています。

プロジェクト1は、テーマ(1)子どもと暴力、(2)子ども時代の戦争体験の研究、(3)和解と「赦し」に分かれています。

プロジェクト2.

育てる関係の危機と子育ての意識の多相性についての研究

子育てに関する調査データの実施・分析を軸に、学際的な観点から、子育て困難、親子関係の困難、自立しない若者などの現実的問題から、発達障害や愛着の形成不全などの理論的、臨床的問題に至るまでを包括的に議論するとともに、実践的なプログラム開発を進めます。また、実践的取り組みとともに、家族社会学、人口社会学などの見地からの社会分析も行い、地域の少子化対策との連携も図っていきます。

プロジェクト3.

芸術学と芸術療法の共有基盤確立に向けた学際的研究

プロジェクト1、プロジェクト2のいずれの領域においても重要な心理療法技法であり、本研究所が特に力を入れて実践してきた芸術療法をあらためて考察の俎上に載せ、治療実践と芸術学的立場からの人間精神の探究との関係を整理します。今現在臨床現場で活躍している芸術療法家と、芸術学専門家との学際的対話という、従来十分なされてこなかった試みに、本研究所の特質を生かして取り組みます。全体として、現代における芸術経験の位置を問い直すことも視野に入れています。

プロジェクト4.

心理療法の現在に関する検証—臨床と研究の即応的関係の構築—

外傷臨床、被害者支援、加害者教育、子育て支援、親子治療、自立支援などの実践領域、あるいは芸術療法という、他の3プロジェクトにおけるさまざまな実践を、心理療法の観点から総合するとともに、これまでに展開されてきた心理療法の成果と問題点を振り返りながら、心理療法の本質を再考します。医療領域のみならず、地域社会、教育領域、福祉領域などにおいて発生しつつある新たな臨床課題に対処してゆくために当研究所、および甲南大学カウンセリングセンターにおいて蓄積してきた実践経験を基盤に、方法的検討を展開してゆくことを目的としています。

本プロジェクトは、他の3プロジェクトを包括するかたちで連携しながら、現代社会の状況認識を実践的な対応に結びつける役割を果たします。

各プロジェクトの活動状況

今年度前期はプロジェクトごとに班会議を開き、研究員および協力者同士で議論を重ねながらテーマを深め、また今後の活動計画や進め方を検討しました。後期からは、こうした班会議に加え、公開研究会や研修会、他大学との交流など、さらに充実した研究活動を行っていきます。

1. 加害－被害関係の多角的研究

初年度は個別テーマ(2) 子ども時代の戦争体験の調査、(3) 和解と「赦し」を中心に始動した。

◇合同班会議(5月)にて研究員同士の情報交換および問題提起を行った。

◇(2)のアンケート/インタビュー調査研究では、前年度に行った聞き取り調査(10件)結果の基礎分析をもとに、「日本トラウマティックストレス学会」にて発表(5月)。つづいて班会議(6月、8月)では、調査結果をさらに本格的に分析する方法を検討し、また今後の調査に向けて、質問票の改善をはかった(現在進行中)。調査は来年度実施予定。さらに今年度、このテーマで公開研究会を行う(詳細未定)。

◇(2)では、芦屋市精道国民学校昭和22年卒業生に協力していただき、歴史的観点から阪神間の戦争体験の記憶を調べ、この地域の戦争史の一側面を構築していく。まず協力者代表と顔合わせを行った(8月)。

本格的な聞き取り調査は10月から開始。

さらに、芦屋市史編纂事業を担っている芦屋市立美術博物館と連携した(9月)。資料の相互閲覧や、将来、研究成果の一般開示にむけ企画展や公開講座などを協同で開催していく予定。

◇(3)では、班会議(10月)を開催。今、現に起きている紛争後の和解のあり方と問題について、カンボジア調査報告がなされた。今後、さらに班会議を重ねていく。

2. 育てる関係の危機と 子育ての意識の多相性についての研究

昨年度までの「子育て研究会」の定例会を、本プロジェクトにおける班会議と位置づけ、これまで通り月に一度開催している。内容は以下の事項に関する検討や議論が中心。

◇学会発表

[第2回]子育て環境と子どもに対する意識調査(共同研究事業Ⅱの一環として2006年に実施)の結果について、さらに考察を深め、以下の2学会で計8題の発表を行った。

- ・日本家族心理学会第25回大会(8月22～24日・東北工業大)
- ・日本心理臨床学会第27回大会(9月5、6日・筑波学院大)

◇父親インタビュー

昨年度末に実施した予備調査の結果を分析(その内容は、当研究所紀要10号に論文を投稿)。その分析結果を受けて本調査の方針を固め、今年度中に20件の父親インタビューを実施する。

◇神戸大学との連携

神戸大学が子育て支援を目的に運営しているサテライト施設「のびやかスペース あーち」との連携を開始する。まずは、プロジェクト4で行われている子育て支援事業の担当者スタッフとして参加している大学院生が、先方を訪問する。伊藤篤先生(神戸大学)には班会議にゲストとしてお越しいただく予定。

3. 芸術学と芸術療法の共有基盤確立に向けた学際的研究

今年度後半から開始予定のアンケート/インタビュー調査に向けた準備が中心となっている。

◇班会議(6月)にて研究員同士の情報交換および問題提起を行った。アンケート調査について、そのあり方や意義などを討議するとともに、具体的な質問の内容や文言を吟味した。

その後、学内にて小班会議を重ね、アンケート紙を完成させ、今秋より調査を開始。

4. 心理療法の現在に関する検証 —臨床と研究の即応的関係の構築—

来年度開催を予定している「事例研究会」に向けた準備が中心となっている。

◇月に1回のペースで研究員・院生で構成された第1期メンバーで班会議を重ね、質問紙の作成を進めている(4月～現在)。具体的には、「事例研究会」にて扱われる事例の読み込み(4月～6月)、質問紙作成の参考とするため、並行して臨床心理学を専門とする兼任研究員に事例に関するインタビューの実施(8～9月)、小グループに分かれての質問項目作成(7月～現在)を行っている。その他、「事例研究会」への協力者選定のため、文献収集を行っている。

●研究計画会議

2008年11月16日(日)午後2時から

甲南大学18号館3階講演室にて

文部科学省の支援事業採択を受け、参加研究員が一堂に会して、今後の研究計画について議論することになりました。

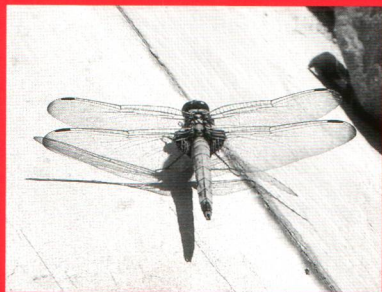
今年度計画の公開研究会・研修会

- プロジェクト1 [加害－被害関係]に関連した公開研究会
- 園芸療法研修会
- 心理臨床ワークショップ

進行中の実践活動(プロジェクト4)

- 子育て支援(カウンセリングルーム担当)
- 思春期発達支援(カウンセリングルーム担当)
- アートグループ(カウンセリングルーム担当)
- 園芸療法(学生相談室担当)

発行年月日: 2008年10月22日



編集後記

KIHSにまた新たな5年間がやってきました。これまで10年間かけて育ててきたものがさらに大きく羽ばたこうとしています。トンボは前にしか進まず退かないことから「勝ち虫」と呼ばれる縁起物。KIHSもこれからもっともっと前進して参ります。今後ともよろしく願い申し上げます。